

# 実験データ解析概論

— 統計学に基づく「よりよい推論」のために —

三中信宏

MINAKA Nobuhiro

独立行政法人 農業環境技術研究所 生態系計測研究領域 上席研究員 [生物統計学]

東京大学大学院 農学生命科学研究科 生物・環境工学専攻 教授 [生態系計測学]

東京農業大学大学院 農学研究科 客員教授 [応用昆虫学]

<mailto:minaka@affrc.go.jp>

(メール)

<http://twitter.com/leeswijzer/>

(ツイッター)

<http://cse.niaes.affrc.go.jp/minaka/>

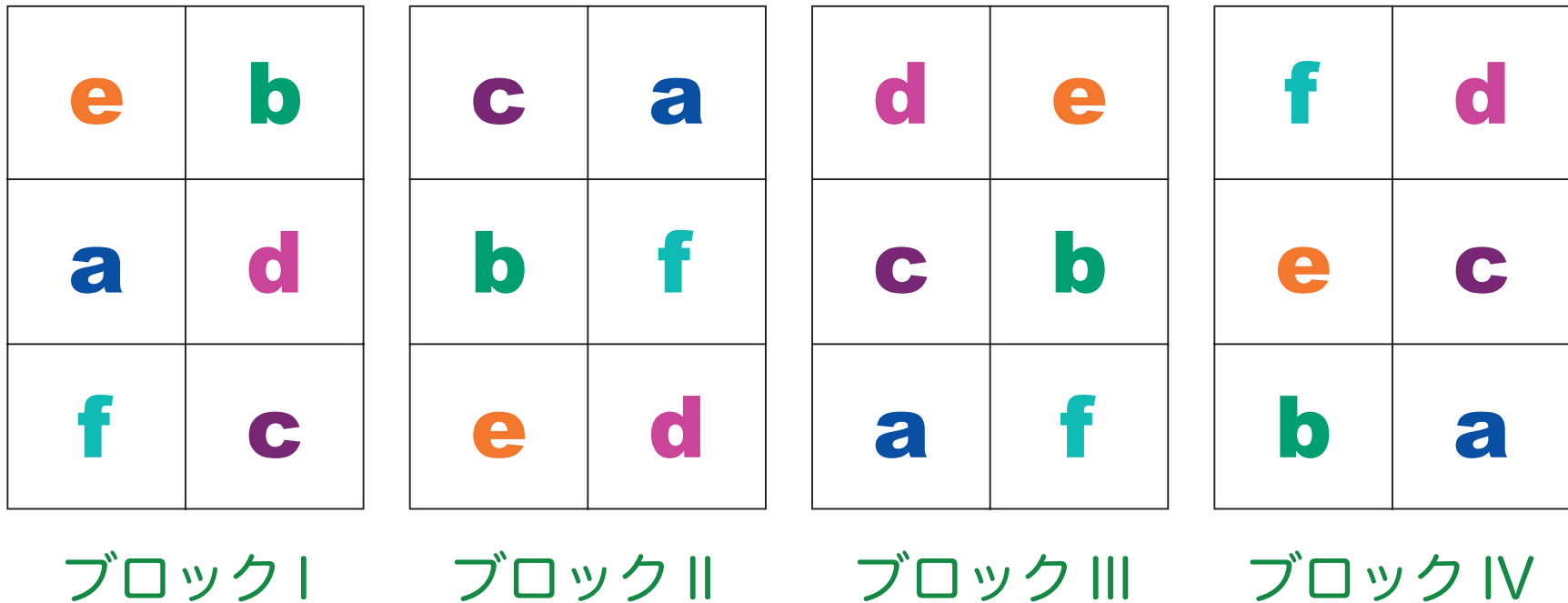
(ウェブサイト)

<http://d.hatena.ne.jp/leeswijzer/>

(ブログ)

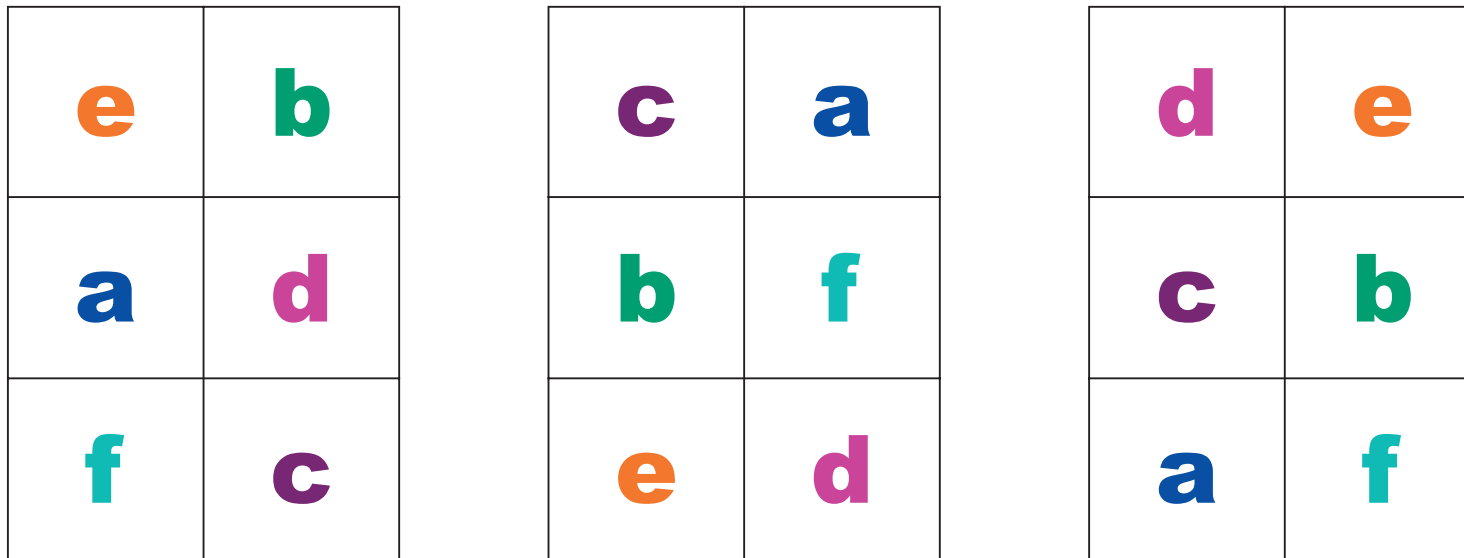
# 1 要因乱塊法 (Box 2)

[実験] 播種密度条件 (6 水準 a ~ f) を変えたイネ収量  
実験を 4 反復の乱塊法で実施した (IRRI).



# 1 要因乱塊法 (Box 2)

なぜブロックをつくるのか？

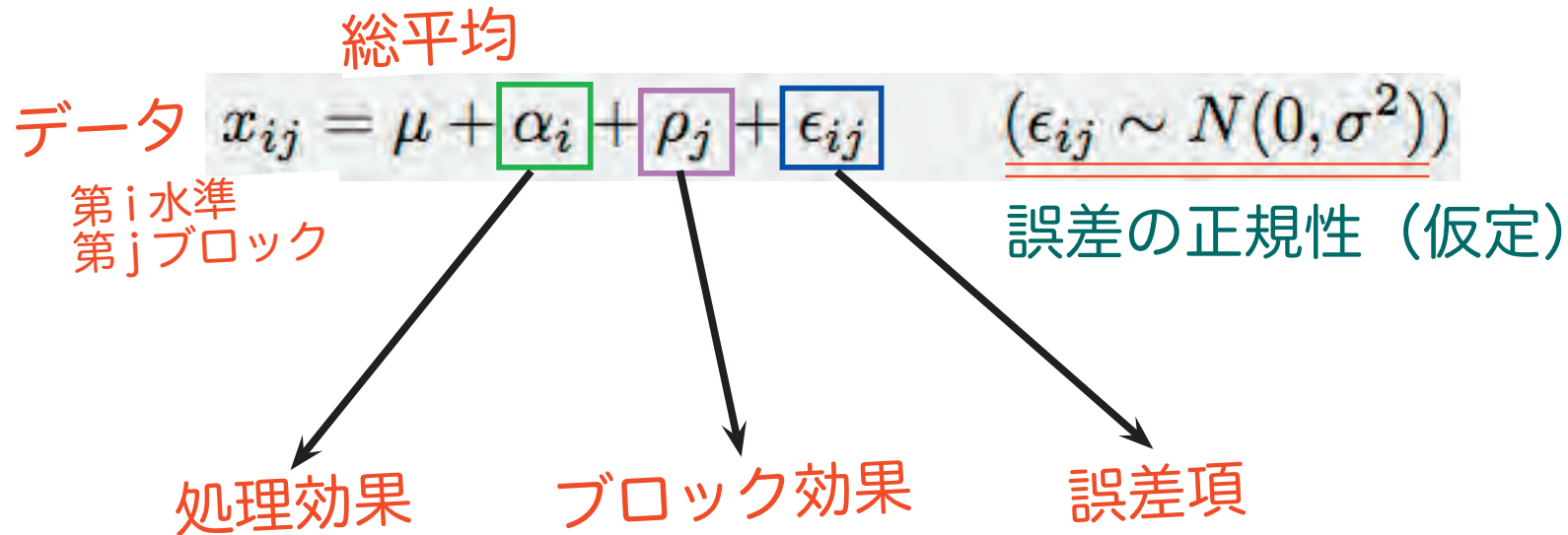


湿润 ←—————→ 乾燥  
水条件の勾配

背景要因の勾配に関する事前情報があるとき、その勾配に直行する方向にブロックを切ることにより、背景要因の影響をブロック効果としてコントロールできる。

# 1 要因乱塊法 (Box 2)

## 乱塊法の線形モデル



「ブロック効果」を明示的にモデルに組み込むことにより，背景要因がデータに与える影響を解明できる。

# 1 要因乱塊法 (Box 2)

## データの構造

処理 Treatment, kg seed/ha	Grain Yield, kg/ha				Treatment Total	Treatment 平均
	Rep. I	Rep. II	Rep. III	Rep. IV	(T)	処理平均
25	データ	3,000	5,307	誤差偏差	10,496	5,124
50	5,346	5,952	4,719	4,264	20,281	5,070
75	5,272	5,713	5,487	4,749	21,217	5,304
100	5,164	4,831	4,986	4,410	19,391	4,848
125	4,804	4,848	4,432	4,445	18,832	4,708
150	5,254	4,542	4,919	4,445	18,813	4,703
Rep. total (R)	30,953	31,284	29,846	26,947		
Grand total (G)	ブロック平均				119,030	総平均
Grand mean	ブロック偏差					

「全偏差 = 処理偏差 + ブロック偏差 + 誤差偏差」と分割する

# 1 要因乱塊法 (Box 2)

## 偏差の分割ならびにその後の手順

$$\begin{aligned} \text{全偏差} \quad x_{ij} - \bar{x}_{..} &= \text{処理偏差} \quad (\bar{x}_{i.} - \bar{x}_{..}) \\ &+ \text{ブロック偏差} \quad (\bar{x}_{.j} - \bar{x}_{..}) \\ &+ \text{誤差偏差} \quad \{(x_{ij} - \bar{x}_{..}) - (\bar{x}_{i.} - \bar{x}_{..}) - (\bar{x}_{.j} - \bar{x}_{..})\} \\ &= \text{処理偏差} \quad (\bar{x}_{i.} - \bar{x}_{..}) + \text{ブロック偏差} \quad (\bar{x}_{.j} - \bar{x}_{..}) + \text{誤差偏差} \quad (x_{ij} - \bar{x}_{i.} - \bar{x}_{.j} + \bar{x}_{..}) \end{aligned}$$

全偏差の分割に対応して、全平方和を各要因に対応する平方和に分割できる。さらに、平方和の自由度もまた並行的に分割される。

# 1 要因乱塊法 (Box 2)

## 分散分析表 (1)

Source of Variation	Degree of Freedom	Sum of Squares	Mean Square	Computed $F^b$	Tabular $F$	
					5%	1%
Replication	3	1,944,361	648,120			
Treatment	5	1,198,331	239,666	2.17 <sup>ns</sup>	2.90	4.56
Error	15	1,658,376	110,558			
Total	23	4,801,068				

## 2 要因乱塊法 (Box 3)

[実験] 窒素施肥量 N (5 水準) とイネ品種 V (3 水準) でのイネ収量実験を 4 反復の乱塊法で実施した (IRRI).

Nitrogen Level, kg/ha	Factorial Treatment Combination		
	6966 ( $V_1$ )	P1215936 ( $V_2$ )	Milfor 6(2) ( $V_3$ )
0( $N_0$ )	$N_0V_1$	$N_0V_2$	$N_0V_3$
40( $N_1$ )	$N_1V_1$	$N_1V_2$	$N_1V_3$
70( $N_2$ )	$N_2V_1$	$N_2V_2$	$N_2V_3$
100( $N_3$ )	$N_3V_1$	$N_3V_2$	$N_3V_3$
130( $N_4$ )	$N_4V_1$	$N_4V_2$	$N_4V_3$



## 2 要因乱塊法 (Box 3)

### 実験区配置

窒素 (N) と品種 (V) のすべての水準の組み合わせを、各ブロックにおいて無作為配置した。

	$V_3 N_2$	$V_2 N_1$	$V_1 N_4$	$V_1 N_1$	$V_2 N_3$
Rep. I	$V_3 N_0$	$V_1 N_3$	$V_3 N_4$	$V_1 N_2$	$V_3 N_3$
	$V_2 N_4$	$V_3 N_1$	$V_2 N_0$	$V_1 N_0$	$V_2 N_2$

	$V_2 N_3$	$V_3 N_3$	$V_1 N_1$	$V_2 N_0$	$V_2 N_1$
Rep. II	$V_1 N_3$	$V_3 N_2$	$V_1 N_2$	$V_1 N_4$	$V_2 N_4$
	$V_1 N_0$	$V_3 N_4$	$V_2 N_2$	$V_3 N_1$	$V_3 N_0$

	$V_1 N_1$	$V_3 N_0$	$V_1 N_0$	$V_3 N_1$	$V_1 N_4$
Rep. III	$V_2 N_2$	$V_1 N_2$	$V_1 N_3$	$V_2 N_4$	$V_3 N_4$
	$V_2 N_0$	$V_3 N_2$	$V_2 N_1$	$V_2 N_3$	$V_3 N_3$

	$V_1 N_2$	$V_2 N_2$	$V_2 N_4$	$V_1 N_0$	$V_2 N_0$
Rep. IV	$V_1 N_3$	$V_3 N_1$	$V_1 N_4$	$V_1 N_1$	$V_2 N_3$
	$V_3 N_0$	$V_2 N_1$	$V_3 N_2$	$V_3 N_3$	$V_3 N_4$

## 2 要因乱塊法 (Box 3)

### 得られたデータ

Nitrogen Level, kg/ha	Grain Yield, t/ha				Treatment Total ( <i>T</i> )
	Rep. I	Rep. II	Rep. III	Rep. IV	
	$V_1$				
$N_0$	3.852	2.606	3.144	2.894	12.496
$N_1$	4.788	4.936	4.562	4.608	18.894
$N_2$	4.576	4.454	4.884	3.924	17.838
$N_3$	6.034	5.276	5.906	5.652	22.868
$N_4$	5.874	5.916	5.984	5.518	23.292
	$V_2$				
$N_0$	2.846	3.794	4.108	3.444	14.192
$N_1$	4.956	5.128	4.150	4.990	19.224
$N_2$	5.928	5.698	5.810	4.308	21.744
$N_3$	5.664	5.362	6.458	5.474	22.958
$N_4$	5.458	5.546	5.786	5.932	22.722
	$V_3$				
$N_0$	4.192	3.754	3.738	3.428	15.112
$N_1$	5.250	4.582	4.896	4.286	19.014
$N_2$	5.822	4.848	5.678	4.932	21.280
$N_3$	5.888	5.524	6.042	4.756	22.210
$N_4$	5.864	6.264	6.056	5.362	23.546
Rep. total ( <i>R</i> )	76.992	73.688	77.202	69.508	
Grand total ( <i>G</i> )					297.390

## 2 要因乱塊法 (Box 3)

### 線形モデル

データ      総平均      処理効果

$$x_{ijk} = \mu + \{\alpha_i + \beta_j + (\alpha\beta)_{ij}\} + \rho_k + \epsilon_{ijk} \quad (\epsilon_{ijk} \sim N(0, \sigma^2))$$

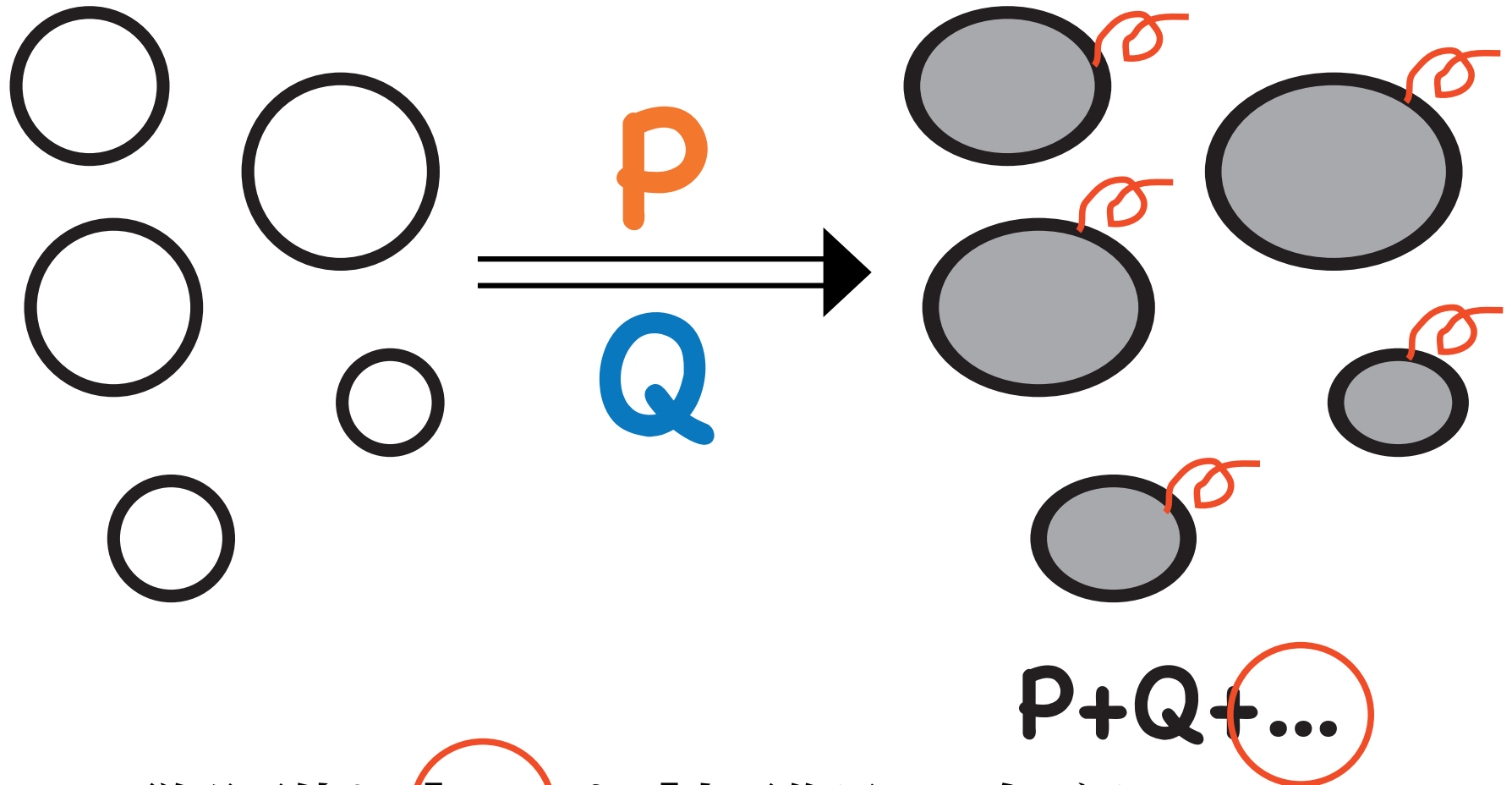
第 i 水準  
第 j 水準  
第 k ブロック

誤差の正規性 (仮定)  
誤差項  
ブロック効果

第 i 処理効果    第 j 処理効果    交互作用効果

複数の要因を含む実験計画では、要因間の「交互作用」をモデルに組み込む必要がある。

# 要因間の交互作用とは何か？



説明不能な「...」を「交互作用」と名づける。

# 実験区配置の「ネスト」と「クロス」

## 通常の乱塊法配置

要因 A（水準  $a_1$  と  $a_2$ ）と要因 B（水準  $b_1 \sim b_3$ ）に関する 3 反復の乱塊法を実施するとき、通常は各ブロック内で無作為化配置する。

$a_2b_1$	$a_1b_3$
$a_1b_2$	$a_2b_1$
$a_1b_3$	$a_2b_2$

ブロック I

$a_1b_3$	$a_1b_2$
$a_2b_2$	$a_2b_1$
$a_1b_1$	$a_2b_3$

ブロック II

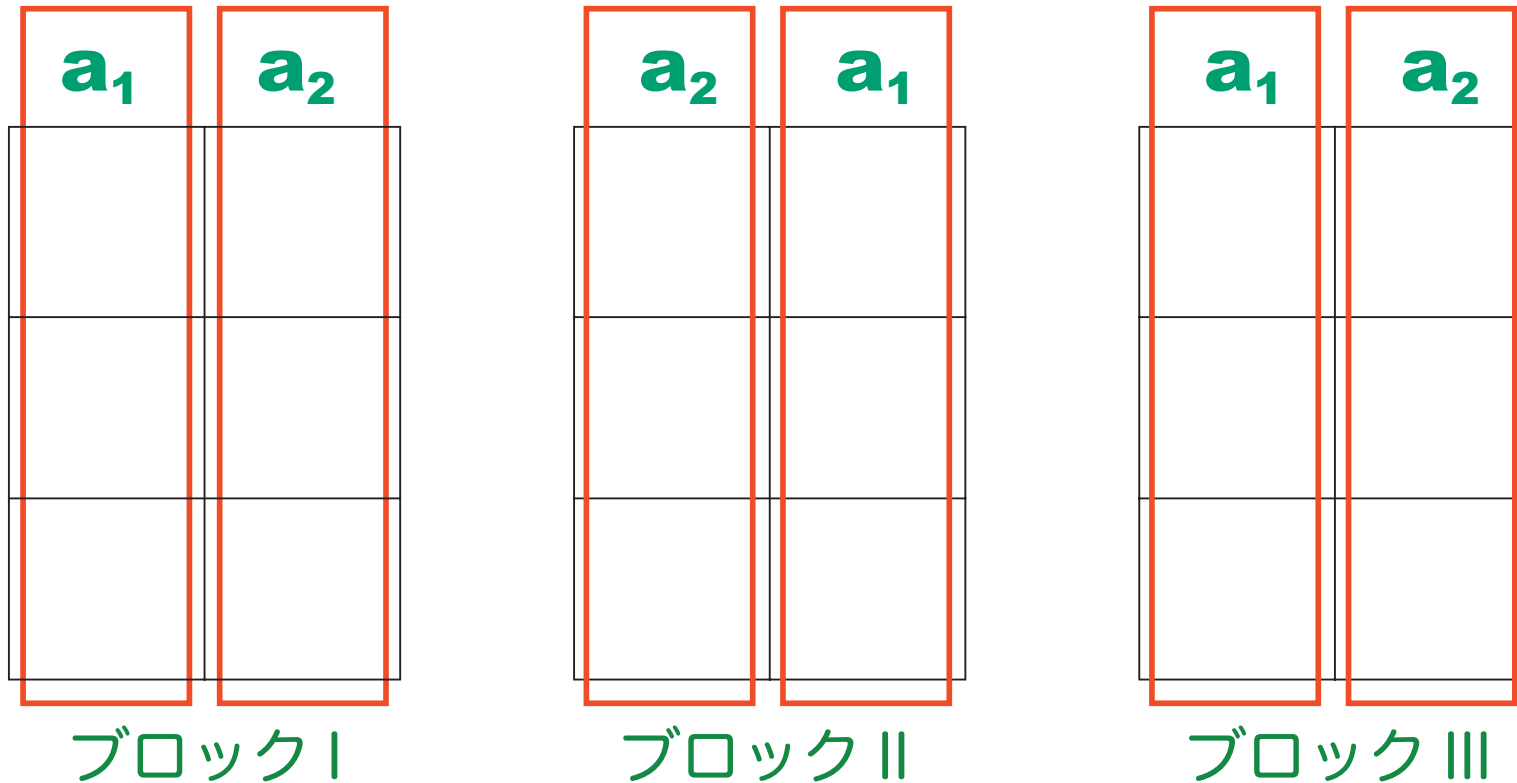
$a_1b_2$	$a_2b_1$
$a_2b_3$	$a_1b_2$
$a_2b_1$	$a_1b_3$

ブロック III

# 実験区配置の「ネスト」と「クロス」

## 分割区法 (split-plot) による配置

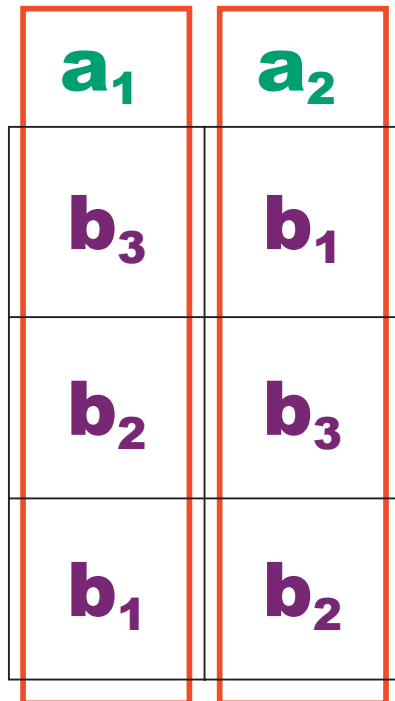
分割区法は, 最初に無作為に割付ける一次要因 (A) の分割区の中で, あとで無作為に割付ける二次要因 B をネストさせる.



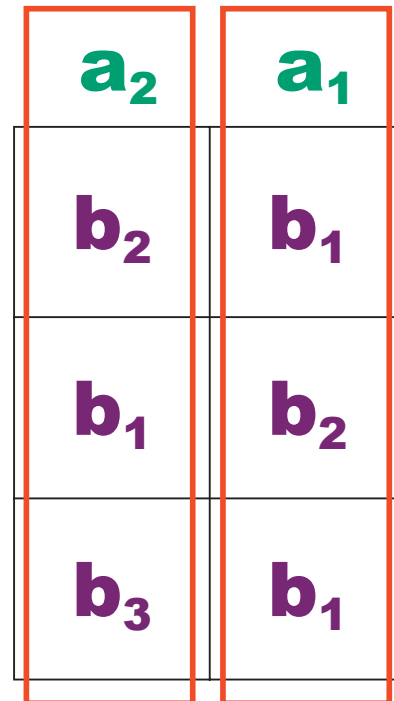
# 実験区配置の「ネスト」と「クロス」

## 分割区法 (split-plot) による配置

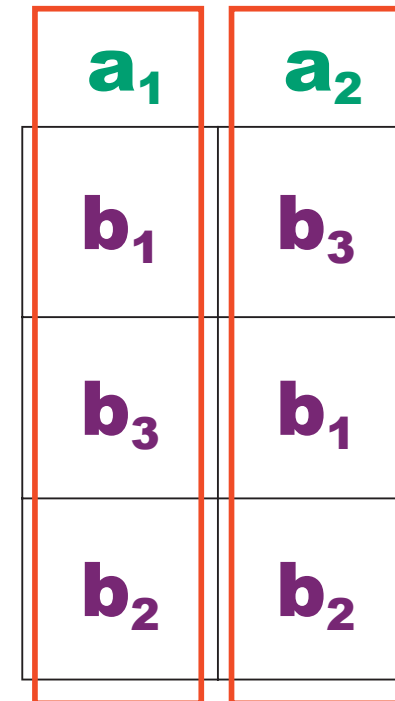
分割区法は, 最初に無作為に割付ける一次要因 (A) の分割区の中で, あとで無作為に割付ける二次要因 B をネストさせる。



ブロック I



ブロック II



ブロック III

# 実験区配置の「ネスト」と「クロス」

## 分割区法 (split-plot) の線形モデル

総平均      ブロック効果      誤差項 1      誤差項 2

データ  $x_{ijk} = \mu + \rho_k + \{\alpha_i + \epsilon_{ik}^{(1)}\} + \{\beta_j + (\alpha\beta)_{ij} + \epsilon_{ijk}^{(2)}\}$

第 i 水準  
第 j 水準  
第 k ブロック

一次要因分析      二次要因分析

分割区法の線形モデルは、一次要因と二次要因（および交互作用）で別々の誤差項を指定し、それぞれの分散分析は対応する誤差項を基準にして実施される。